うたのこころ

浅野千鶴子

〝うたのこころ〟というテーマで何か書くようにとの編集部からのお便りで筆を取りました。詩人北原白秋は〝森羅万象、生きとし生けるものの生命を尊び、あわれみ、それに頭を下げる、これが詩の心であり、聖心、神へ通じる心であるとの味わい深い言葉を残しております。この詩心こそあらゆる芸術の心となり、魂となるものだと思います。そしてこのうた心こそ芸術家のみでなく、すべての人の心にはぐくまれてほしいものだとしみじみ思うのです。聖アウグスチヌスは〝歌うは愛する業なり〟といっています。詩を読み、歌をうたうのはみなこの愛の業だということでしょう。本当に味わうべき言葉と思います。詩人が心をこめてうたい上げた詩をうたうものも愛をこめて歌うのは当然のことなのですが、このごろの若い人たちのうたに、どうもこのうたの心が足りないことを残念に思っています。声量は立派でも、聞く者の心に何もふれるもののないのはさびしいことです。昨年六月イタリアのブセートという所で行われました国際声楽コンクールに参加しました時も、世界各国から応募した百人近い人の中で、九名の日本人が歌ったのですが、声をはり上げるだけで、心にうったえるものがありませんでした。何が不足なのでしょうか。それはあらゆるものに対する暖かい愛がないことだと思います。幼い子どもの心にまず暖かい愛のいぶきをささやくのは母のやさしいまなざしと、子守歌でしょう。それから子どもたちの成長と共に、あらゆるものに対する愛と詩心を教えるのは、大自然のふところだと思うのです。私たちの幼い日の思い出といえば、ほとんど自然の中にいる自分の姿です。れんげ草や菜の花畑、校庭のさくら、ほたる追いの夜、川辺の夕暮をほの白く咲いていた月見草等。私が

小学校五年生の時、一年上級の女の子（名前はもう忘れました）が

聖堂の鐘のひびきに花ゆれて
春日のどかにたそがれてゆく

という和歌をよんだことを今もおぼえています。私も小学校二、三年のころ〃お茶わんの音にめさます子猫かな〃などという駄句をよんだりしていました。とにかく昔はもっと自然が私たちを包んでいてくれましたから、自然に詩も生まれ、句もうかんできたのでしょう。今の子どもたちは自然の美しさ、恵みなどから遠くはなれて行くようで本当にかあいそうな気がいたします。

人間の本当の幸福はその人の心の中に宿る愛の密度ではないでしょうか。そしてそれは幼いころの心にやどった自然への愛、つまり詩の心が一番大切な種子のように思えるのです、何とかして日本のよき将来のためにも、私たち大人の責任として、大切な子どもたち一人一人の心を自然への愛に向け、そこから詩の心へ、またあらゆるものへの暖かい思いやりから、真に深い人類愛へと育てて行かなければとしみじみ思うこのごろです。子どもたちを直接ご指導なさる先生方、そしてお母さま方に私は心からおねがいしたいのは、どうか子どもたちと一緒に可愛い子どものうたをお歌いくださることです。最近ピアノはわれもわれもとまるで競争のようにひかせていられるようですけれど、昔の小学校唱歌の様な格調の高い子どものうたはあまり歌われていない様です。そして現在の教育は子どもたちにあまりにも、勉強勉強、試験試験と強いることが多く、大切なことが忘れられていると思います。子どもの夢はうばわれ、実に子どもらしさのない子どもたちになってしまうような気がして、心いたむ思いです。そもそも子どもは生まれながらに絵を書き、うたを歌うという天性をさずかっていて、自分たちの周囲にある生命あるものまた生命なきものまで、あらゆるものに興味と親しみを持って近づこうとしています。そうして子どもほどこの宇宙の神秘や美しさに、驚ろきとよろこびを感じることが強いと思うのです。

空も、雲も、花も木々も、小鳥たちも、犬も猫も、カエルも、めだかも、小さい虫も、石ころさえも、子どもたちに取っては親しい友だちなのです。

愛とはその対象を尊び、大切にすることです。子どもたちの心こそどんな小さいものも大切にし、自分の友としようとしています。この美しい幼い心を大切に育てて行くの

が、私たち大人のただ一つの尊い仕事とつくづく考える次第です。

もう一度白秋の言葉を思い出して見ましょう。詩の心とは森羅万象、生きとし生けるものの生命をあわれみ、尊び愛すること、そしてそれは神に通じる心〃とありますが、この神に通じる心こそ、うたの心であり、それはまた生きとし生きるものへの神の愛を知ったものの、静かな祈りではないでしょうか。私たちは何とかして幼い子どもたちの心にこの神の愛を感じさせたいと心から願うものです。

神様はのきの小雀まで
おやさしくいつも守り給う
小さいものをもお恵みある
神様わたしを愛し給う
野辺の花、小鳥、よろずのもの
お作りになりて愛し給う
小さいものをおめぐみある
神様わたしを愛し給う

子どものころよく歌っていたうたです。こんなうたをお母様がご一緒に歌ってくだったら、子どもたちはどんなに幸福でしょう。

（声楽家）

七月のうた

今、〃七月のうた〃というと、多分皆さんは〃ささのはさらさら　軒ばにゆれる〃という〃七夕さま〃の歌を思い浮かべる方が多いのではないでしょうか。毎回どうも古いことばかり申し上げておはずかしいのですが、私が思い出すのは、〃水鉄砲〃なのです。水をくんできて、水鉄砲で、シュッシュッと水をかけあう。歌いながら、遊戯をしながら、本当に水がからだにかかるような気持ちになったものです。およそ単純なメロディー、リズムですが、それだけにすぐ覚えたのかもしません。そしてこれを歌うたびに、もうなくなられた幼稚園時代の恩師、新庄よし子先生の、お元気な大きなお声、着物にはかまというお姿で子どもたちと一緒にお遊戯をなさっていたお姿が、ハッキリと目の前に浮かぶのです。そして当時、私が家へ帰ってして見せた遊戯を、私の母はちゃんと覚えていて、今、自分のひ孫に教えているのです。

（赤間　峰子）